『ショーペンハウアー研究』第22号抜刷・二〇一七年一〇月

イェンス・レマンスキー（ハーゲン）

ショーペンハウアーにおける意味の使用理論と文脈原理

――ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』との並行関係――

太田匡洋 訳

イェンス・レマンスキー（ハーゲン）

ショーペンハウアーにおける意味の使用理論と文脈原理

――ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』との並行関係――

太田匡洋 訳

ヴィトゲンシュタインとのつながりのもとでは、
世間が評している架空のショーペンハウアーではなくて、
実際のショーペンハウアーを、思い出さなければならない。

ガートルード・エリザベス・マーガレット・アンスコム

一．序論

本稿において私は、次のテーゼを裏づけるつもりである。そのテーゼとはすなわち、ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの『哲学探究』（＝*PU*）に先立って、アルトゥール・ショーペンハウアーが一八二〇年から書いていた講義草稿のうちに、「意味の使用理論」が、文脈原理のヴァリアントをも含めたかたちで見いだされうる、というテーゼである。この数多くのオイラー図を含んだ講義草稿が出版されたのは、一九一三年である。この年は、ヴィトゲンシュタインの草稿において、ショーペンハウアーとオイラー図に対する、言語哲学的な分析が何回も行なわれる前年にあたる。本稿の目的は、ショーペンハウアーがその体系からみて「よりよいヴィトゲンシュタイン」であるとか、ヴィトゲンシュタインがその後期哲学の中心理論をショーペンハウアーから「借りていた」ので、我々は歴史の本を書き直さなければなるまい、などといったことを表明することではない。むしろ、前述のテーゼの証明は、言語哲学的な研究にとって、興味深いものであると考えられる。というのも結局は、意味の使用理論も文脈原理も、現代的な意味論の理論的な中心要素を描き出すものであり、その歴史はここ数十年、ますます注目を集めつづけているからである。

厳密には、以下の論考は、二つの研究領域へと向けられている。（一）文脈原理の歴史に関する研究であり、ウィラード・ヴァン・オーマン・クワインと、とりわけロバート・ブランダムの、歴史的テーゼによって裏づけられたもの[1]、（二）ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインの関係に関する研究であり、つい数年ほど前にハンス・ヨハン・グロックによってその学問的な重要性が指摘されたもの、の二つである[2]。以下では、この二つの研究領域の立場を、多少なりともより詳細に叙述する（第二節）。それによって、研究領域（一）がこれまでショーペンハウアーについて何も承知していなかったこと（二．一節）、そして研究領域（二）が、冒頭で立てたテーゼと、ある点において、しかも理由もなく、矛盾していることを（二．二節）、明らかにする。ショーペンハウアー研究における最近の解釈傾向は、ヴィトゲンシュタインに関心のある読者にとっては、あまり知られておらず、また関連するショー

ペンハウアーのテキストの箇所は、ショーペンハウアー研究者にすらあまり知られていない遺稿断片のなかにある。それゆえ第三節では、最近の解釈傾向とその問題を（三．一節）、それらの著作の文脈とともに（三．二節）、簡単に概観する。第四節では、本研究の中心テーゼを検討し、それによってショーペンハウアーにおける意味の使用理論（四．一節）および文脈原理を（四．二節）、ヴィトゲンシュタイン、さらにはフレーゲとクワインとの対比のもとで、紹介する。（性急な読者におかれては、四つの節の概略をご承知のうえで、第二節の頭から直接、第四節に飛んでもらって、それから必要に応じて、読み飛ばした節に戻ってもらっても構わない。）最後に（第五節）、結論をまとめたうえで、考えられうる未着手の研究プログラムへの展望を投げかけたい。

二．本研究の立場

後期ヴィトゲンシュタインは、意味の使用理論（GdB_w）を、そしてゴットロープ・フレーゲは、文脈原理（KTP_F）を、決定的に発展させた。当然ながらこのことが、一般的な哲学史記述の出発点となっている。さて、[GdB] と [KTP] を、一つの命題によって定義しようとすれば、ヴィトゲンシュタインとフレーゲの以下の引用を、引き合いにだすことができるかもしれない。

[GdB_w]「単語の意味とは、言語におけるその使われ方である」[3]

[KTP_F]「命題という連関のうちでのみ、単語は何かを意味する」[4]

教科書的な見方や一般的な哲学史記述によれば、

[GdB] と [KTP] は、伝統的論理学に取って代わるべき理論として、理解されなければならない。というのも、[GdB] と、言語の表象理論のあいだには、また [KTP] と、合成原理のあいだには、隔絶が存しているからである。[5] 伝統的論理学の二つの理論、すなわち言語の表象理論（RdS）と合成原理（KPP）は、ヴィトゲンシュタインの一連の引用によって説明することができる。これについて、*PU* のなかでは、次のように論じられている。

[RdS]「言語の単語とは対象の名前である」[iii]

[KPP]「文とは、それらの名前をつないだものである」[6]

さて、文脈原理の歴史に関する研究と（二．一節）、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインの関係についての研究（二．二節）を調べてみても、ショーペンハウアーが [GdB_w] や [KTP_F] を先取りしていたことへの言及は、見当たらない。

二．一　文脈原理の歴史の研究

管見の限りでは、これまで [GdB] の前史についての歴史的研究は、ヴィトゲンシュタインの「最も近い先祖」のもとで、立ち往生している。その限りでは、前述の研究を例として、これまでショーペンハウアーへの言及が存在していないことは、驚くにあたらない。その一例として、ここではクワインを挙げることができる。彼は自らの [GdB] の先駆者として、ジョン・デューイの名前を挙げている。クワインは『存在論的相対性』のなかで、デューイの行動主義理論（「意味とは・・・第一義的に行動の特性である」）から、自らの使用理論（「言葉の使い方を知ること」）を導き出しており、ヴィトゲンシュ

タインの理論の先駆けとして、このデューイの理論を際立たせる。[7] このクワインの発言についての研究は、今日にいたるまで、ヴィトゲンシュタインとデューイの［GdB］が同一かどうか、またどの程度まで同一か、という問いを越え出たことは無かったように思われる。[8]

その一方で、［KTP］の歴史的な見直しと評価については、事情が異なっている。［KTP］の前史について、歴史的な覚書を遺した最初の一人は、ここでもまたクワインである。その覚書によれば、［KTP］はフレーゲより前に、すでにジェレミー・ベンサムによって定式化されて用いられていた。[9] このテーゼはまず、ジョン・ウォレスによって支持されたが、後にハンス・スルガとロバート・ブランダムによって、修正が加えられた。このことは、とりわけブランダムが、カントの『純粋理性批判』のなかに、［KTP］のヴァリアントを指し示そうとしていることからも、みてとれる。それにとどまらず、現在の研究においては、古代哲学に加えて、カント以降の哲学、とりわけ一八三〇年以降の哲学のうちに、［KTP］のヴァリアントが場所を有している。[10] ただしショーペンハウアーが、今日に至るまで、このような脈絡のなかで言及されたことはない。

二、二　ヴィトゲンシュタインとショーペンハウアーの関係についての研究

両者の関係の研究についても、似たような判定を下すことができる。ここで私は、「関係」および「関係の研究」という、比較的中立的な表現を選んだ。というのも、この研究領域においては、歴史的な影響ないし受容の研究と、体系的な比較研究のあいだの区別が、往々にして不明瞭にとどまるからである。そのような関係の研究がそもそも存在するのだという事実は、ヴィトゲンシュタインが一六歳の

時に初めてショーペンハウアーを研究したのだという、何人かのヴィトゲンシュタインの友人や弟子たちの主張によって、裏づけられる。[11] もう一方で、この関係の研究のもつ正当性は、後期のヴィトゲンシュタインがショーペンハウアーの影響をはっきりと認めたことによって、保証されている。[12]

まずは、関係の研究について、大まかな展望と定量測定を行えるように、以下に二つの表をまとめた。表1においては、ヘッダ列に、研究文献が（年代順に）挙げられており、ヘッダ行には、研究で扱われた中心テーマが、まとめられている。フィールドの中の数字は、対応する頁数を示している。ただし、ここで挙げられているのは、対応するテーマに対して、比較的事細かに取り組んでいる研究に限られる。表2では、ヘッダ列に、ショーペンハウアーの著作を、ヘッダ行には、ヴィトゲンシュタインの著作が、挙げられている。いずれについても、研究文献（表のフィールド）のなかで、深く論じられている場合に限られる。二つの表とも、欄外の書きつけや、付随的な覚書、個別のテーマへの寸評などは、部分的には質的にも興味深いものではあるが、挙げられていない。ここで考慮に入れられたのは、英語とドイツ語の出版物（「灰色文献」は除く）で、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインを、直接比較しようとしているものである。これらの完全な文献情報は、文献目録から確認することができる。

表1　研究テーマ

テーマ／文献	美学	倫理学	論理学／言語哲学	数学	形而上学／哲学	自然科学／自然主義	宗教／神秘主義	独我論／認識論	世界／表象主義	意志／志向性	時間
1963 Gardiner		275-282					281		280	279	
1966 Janik (再版：1985)	43-46	41-47	35, 38	36, 38-39	26-31	36-37, 39	29-30, 41, 44-47	32-35, 45-47	32-35, 43	39-43, 45-47	
1969 Engel			287-299		299-302						
1973 Griffiths	97, 115	97, 104-116	101-102			99	98, 112	100-103	102-103	105-108	99-100
1975 Hacker (再版：1986)	97-99				93-96			81-82, 87-93		91	
1976 Griffiths			4-10, 12-15	6-9					5-9, 12-16	15-19	11-12
1978 Clegg	29-30, 42-44	29-30	29-30, 33-36, 41-43		32, 39		32-35, 43-46	30-36	40-44	40-43	
1979 Goodman		437-447			439-440			440-441, 444-445	440	438, 443	445-447
1981 Worthing-ton		481-489	482-483, 494-496		489-496		481, 487, 490-492, 494		482, 490-492	484	484, 486-489
1982 Janik			272-273, 275-278					276			
1983 Churchill	499	499	492-493, 497-499		491-500		497-499	490-492	491-500	491, 493-496	497, 499
1983 Magee (再版：2002)		319-320	321-322					322-324, 338	316, 322-324	311, 314-316	
1988 Clegg			83-100						82-84	90	
1989 Janaway		333-342	331-332				318-321	321-331	321-328	336-342	
1989 Lange		29	32-52, 53-88		1-31, 32-41, 109-110		10, 109-112	41, 53-54, 69-134	26-28, 32-52, 64-88, 104-106	7-9, 97-103	
1992 Janik			73-77		70-73	69-77					
1992 Weiner	84-88, 105	94-111	24-45	50	9-27	50-51	92, 94-98, 104-108	46-79	46-79	67-72	80-111
1995 Weimer		29-32	17-20, 43-45		27-29	26-27		18, 20-22, 35-42		23-32	
1999 Glock	437-441	437-443	435-437		427-435		441-443	443-449		449-455	
2002 Han	117-118	116-119						112-115		115-116	116-119
2003 Cakmak	124	121-124	118-119				119-120, 124		117-118	116-117	
2011 Millet		76-81			67-70			65-73	69-70, 73-76	73-79	78-79
2011 Tejedor		93-102			97-98			89-102		94-96	
2012 Schröder		368	371-372, 378-379		379-380		380	368-375	368-369	375-377	

表2　著作間比較

ヴィトゲンシュタイン／ショーペンハウアー	『論考』1914-16／『日記』	『哲学探究』(PU)	『青色本』	『哲学的考察』	『ビッグ・タイプスクリプト』／『哲学的文法』	『確実性について』
『意志と表象としての世界』	Gardiner 1963, 275-282; Janik 1966, 26-47; Engel 1969, 287-30 1; Griffiths 1973, 96-116; Hacker 1975, 81 -100; Clegg 1978, 29-46; Goodman 1979, 437-445; Worthington 1981, 481-496; Churchill 1983, 489-501; C1egg 1988, 82-94; Janaway 1989, 318-342; Magee 1989, 313-315; Lange 1989, 1-134; Weiner 1992, 9-111; Weimer 1995, 23, 32-33; Glock 1999, 427-452; Han 2002, 112-119; Cakmak 2003, 115-125; Millet 2011, 63-81; Tejedor 2011, 85-102; Schröder 2012, 367-375	Engel 1969, 287, 297; Clegg 1988, 94-100; Magee 1989, 313, 326; Lange 1989, 110-134; Janik 1992, 69-77; Weimer 1995, 13-25, 40-45; Glock 1999, 452-455; Schröder 2012, 375-380	Lange 1989, 123-134; Weimer 1995, 23-24	Lange 1989, 9, 96	Lange 1989, 96, 117-134; Schröder 2012, 373-375	Janik 1992, 69-77
『充足根拠律』	Griffiths 1976, 4-19; Janik 1982, 275	Janik 1992, 69-77	Engel 1969, 295-299			Janik 1992, 69-77
『余録と補遺』	Magee 1989, 312-313			Goodman 1979, 445-447		
『遺稿』	Wemer 1995, 23	Engel 1969, 287-294				

この二つの表が示すように、本稿のテーマと著作に関わる研究の規模は、時の経つうちにあまりに膨大となっているため、個別のテーゼや議論を論評したり、質的・批判的に評価したりすることは、もとより不可能である。それゆえ、この場では、これらの研究の結論と問題のうち、ここで本研究にとって意味があると思われるものを、いくつか取り上げるにとどめようと思う。このような理由のため、あらかじめ指摘しておくと、本論文の、とりわけ第四節の結論は、一方では「論理学／言語哲学」（表1）というテーマ領域に分類されて、もう一方では「遺稿／*PU*」（表2）という領域に分類されねばならないであろう。

まずは、表2から次のことが読み取れる。たしかに、ほとんどの研究は、『意志と表象としての世界』（＝WWV）と『論理哲学論考』（＝*Tlp*）の関係に関するものである。しかし、ショーペンハウアーの遺稿をヴィトゲンシュタインの後期著作と対比しようとする研究上の努力は、すでにいくつか存在している。これらの研究がショーペンハウアーの主著とヴィトゲンシュタインの*Tlp*にのみ限定されていない理由としては、次のことが考えられる。マギー、そしてとりわけグロックが、繰り返し強調するところにしたがえば、ヴィトゲンシュタインの*Tlp*に対するショーペンハウアーの影響は、それで終わってはおらず、後期ヴィトゲンシュタインにおいてもまた、ショーペンハウアーに対する重要な暗示が存在するとされている。[13] また、ガース・ハレットは、*PU*における四〇ヶ所ほどのショーペンハウアーへの暗示および並行関係について、二〇個以上の主題にわたる索引を作成していた。[14] ジェリー・クレッグの見解にしたがえば、この索引は、それどころかさらに、ほとんど任意に拡張されることができたであろう。[15] これらの暗示のなかでも、最も有名なもの

は、モーリス・エンゲルによって最初に立てられたものである。彼の述べるところによれば、ヴィトゲンシュタインは「家族的類似性」の概念を、ショーペンハウアーから借りてきたとされる。[16] また、その一方では、周知のとおり、ショーペンハウアーの「生活形式（Lebensform）」の概念を、ヴィトゲンシュタインが借用していることが、マギーによって認められていた。[17] 同様にして、ジャニクは、両方の著作家における「訓練」という概念の類似性を、詳細に叙述していた。[18] そして、グロックが強調したところによれば、「メタ論理的」という概念もまた、ショーペンハウアーに由来するものであり、後期ヴィトゲンシュタインは、ショーペンハウアーの意志および志向性の概念を、批判的に問い直していたとされている。[19]

これとは反対に、セヴェリン・シュレーダーは、とりわけ「生活形式」と「家族的類似性」の概念の研究を通じて、ヴィトゲンシュタインに対するショーペンハウアーの影響に、疑問を呈していた。[20] そして、むしろ後期ヴィトゲンシュタインのショーペンハウアーに対する否定的な発言を、両者の相違を裏づけるものとして、引用していた。[21] もっとも、これらの発言は、グロックやジャニク、ランゲの著作における、後期ヴィトゲンシュタインのショーペンハウアーに関する積極的な表現によって、相対化されるものではあるのだが。すでに、シュレーダー以前にも、韓林合は、二人の思想家の関係を、批判的に見定めていた。さらに、ヴォルフガンク・ヴァイマーにいたっては、両者の関係を、否定的なものと見なしていた。そのことは、ヴァイマーが、WIの§9およびWIIの第六節以下における［RdS］に基づいて、後期ヴィトゲンシュタインの［GdB］と比較した際の「ショーペンハウアーの言語哲学の不十分さ」[22] を認めていたことにも見てとれる。また、

クワインが『ことばと対象』で述べた翻訳可能性の問題に関して、ヴァイマーは以下のように述べている。恐らくショーペンハウアーが支持するであろう立場は、「概念はあらゆる文化において同一であるが、他方で言語は文化によって異なる、というものである。このような見解は、私見では［つまりヴァイマーによれば］、その疑わしさがすぐに目につくものである」[23]、と。そのため、後期ヴィトゲンシュタインに対するショーペンハウアーの影響だけでなく、二人の思想家に関する「論理学／言語哲学」というテーマ領域もまた、議論の余地あるものにとどまっている。

しかし、すでにエンゲルの論文の紙幅の多くが、同じくこれら二つの問題領域へと割かれていることは、注目に値する。今でこそ問題領域であることが明らかなこれらのテーマ領域を、あわせて研究することにした理由として、エンゲルは次のことを挙げる。それは、ヴィトゲンシュタインが論理的なテーマに関心を持っており、それゆえショーペンハウアーの主著からその遺稿にいたるまでの、論理学に関する足跡を、ヴィトゲンシュタインが追っていたということである。つまり、グロック、ランゲ、マギー、およびその他多くの人々と同じく、エンゲルもまた、ヴィトゲンシュタインがショーペンハウアーを繰り返し読んでいたことの裏づけを見つけたのだと、信じているのである。その証拠はとりわけ、ショーペンハウアーの『遺稿』においても、ヴィトゲンシュタインの後期著作においても、議論における概念の混乱を常に納得できる仕方で指示するためには、［RdS］が否定されなければならなかったことのうちに見てとられる[24]。これに加えて関心をひくのは、ショーペンハウアーがWIのs9において、言語の表象理論のヴァリアントを拒否しており、そのことによって後期ヴィトゲンシュタインとの並行関係が生じているという点を、シュレーダーもまた強調していることである。しかもシュレーダーは、この点を、後期ヴィトゲンシュタインに対するショーペンハウアーの影響に反論しているはずの、自らの議論に言及するに先立って、強調しているのである[25]。

エンゲルとシュレーダーは、ヴァイマーとは異なり、ショーペンハウアーの言語哲学を、［RdS］にのみ還元しているわけではない。それに対して、ハッカーやクレッグ、チャーチルはさらに、ヴィトゲンシュタインがショーペンハウアーの哲学を意味理論へと変更しようとしていた点に、二人の思想家の関係の独自性があるのだと強調する。これら三者の見立ては、本研究のテーゼを先取りしているようにも見える。とはいえ、チャーチルに言わせれば、ハッカーとクレッグは、その強すぎる限定のあまりに、失敗に終わっている。しかし、チャーチル自身もまた、意味の理論を言語の境界の理論にのみ還元しているので、たしかに意味の理論に関しては、納得のできる研究上の見立ては、これまで存在していない。しかし、その一方で、ショーペンハウアーはそもそもロック以来の言語的意味の基礎づけの問題を知らないのだとする、シュレーダーの主張は[26]、ハッカーやクレッグ、チャーチルの研究を考慮に入れるならば、あまりに性急すぎるものと思われる[27]。

ジャニクは、残念ながらほとんど知られていない論文のなかで、ハッカーやクレッグ、チャーチルをも超えた一歩を踏み出して、次のように主張している。「細かな点に関する見解の相違にもかかわらず、ショーペンハウアーによる論理学の言語内在的な解釈は、ヴィトゲンシュタインの立場を完全に先取りしている」[28]。しかし、この懐深くみえるテーゼは、その基礎づけに関して、ジャニクの中心テーマへと限定されている。すなわち、我々の人間的な思

考方法は自然へと結びつけられている、もしくは自然の拡張を描写するものだという、ジョン・マクダウェルの主著を思い出させるであろうテーゼのことである。ジャニクはその証拠を、ヴィトゲンシュタインのPUおよび『確実性について』のみならず、ショーペンハウアーの学位論文（『充足根拠律』）の一節のうちにも見出している。ここでのショーペンハウアーの記述によれば、言語を自然に習得する場合、あらゆる子供は、直観的に遊びのなかで、論理学のすべての諸規則を、実践的に適用することを習得する。そして、哲学的論理学は、たんに大変な骨折りでもって、これらの諸規則を、理論的に規則として定式化することができるだけである。[29] ジャニクによれば、ヴィトゲンシュタインとショーペンハウアーはこのようにして、「思考の論理は、規則からではなく、表現の適切な適用から成り立っている、という理念」のもとで、互いに一致している。ジャニクは、ここでは表現の適用について、また他の箇所では、意味の理論にも、わずかに言及している。しかしながら、ショーペンハウアーによる「第二の自然の自然主義」が、[GdB] や [KTP] をともに包摂するものかどうかについては、まだ検討がなされないままである。

以上の簡単な概観によって、次のことが確認できた。分析哲学や言語哲学の歴史の研究のなかで、一般に [GdB] や [KTP] の脈絡においては、ショーペンハウアーの名前は出されてこなかった。また、ヴィトゲンシュタインとショーペンハウアーの関係についての今日までの支配的な見解のもとでは、ショーペンハウアーは古典的な [RdS] の支持者ではないと信じられている。ショーペンハウアーの [GdB] に対する関係は、少なくとも暗示されてはきたものの、[KTP] との関係については、今日までまったく研究されることはなかったのである。ただヴァイマーだけは、ショーペンハウアーを [RdS] の支持者と見なしている。また、シュレーダーだけは、ショーペンハウアーを [GdB] へと導きえたであろう意味の問題を、ショーペンハウアーは知らなかったのだ、と確信している。

三．解釈上の問題とショーペンハウアーの「大論理学」

この節では、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインの比較を困難にする、いくつかの解釈上の問題を指摘する（三．一節）。そして次に、ショーペンハウアーの「大論理学」について、簡単に紹介するとともに、この「大論理学」のヴィトゲンシュタインに対する影響について、いくつかの注意をおこなう（三．二節）。

三．一　解釈上の問題

英語圏のいくつかのショーペンハウアーについてのモノグラフィー（例えばマギーやジャナウェイなど）においては、ヴィトゲンシュタインに対するショーペンハウアーの影響が、見通しというかたちで、しばしば紹介されている。だが、それらを別とすれば、表1のヘッダ列に見てとれるように、両者の関係の研究は今日に至るまで、ヴィトゲンシュタイン研究者たちによってなされており、またその研究の基礎は、一九六〇年代から一九八〇年代にかけて作り上げられてきた。ショーペンハウアー研究において要求される、ショーペンハウアーの著作の解釈方法は、かつてドイツや英米の研究が何十年にもわたって前提としてきたものからは、革命的に異なっており、その限りにおいて、前述の状況は問題を含んでいる。簡潔に言えば、今日の研究においては、ショーペンハウアー哲学に対する二つの読み方

が区別されている。[30] すなわち、

[L1] 旧来の規範的な読み方。この読み方にしたがえば、ショーペンハウアーは、カント的な観念論や、消極的なペシミズム、神秘的な非合理主義を支持している。

[L2] 最近の記述的な読み方。この読み方にしたがえば、ショーペンハウアーは、ベーコン的な経験主義や、価値中立的な表象主義、解釈学的な合理主義を支持している。

[L1] の見方にしたがえば、[L2] の立場、すなわち経験主義、表象主義、合理主義、その他諸々の立場は、ショーペンハウアーの全集のうちに出てきておらず、それどころか著者の意見とも矛盾するであろう。[L2] の見方にしたがえば、[L1] の立場、すなわち観念論、ペシミズム、非合理主義、その他諸々の立場は、たしかにショーペンハウアーの全集のうちに出てくるものの、たんに著者によって記述的に述べられているにすぎず、規範的に支持されているわけではない。この数年でなされた詳細な研究サーベイ[31]が示したところによれば、[L1] はドイツ語圏で、特にいわゆる生の哲学の潮流（とりわけハルトマン、ニーチェ、ジンメル）によって、さらには英米圏で、とりわけカントに関心を持つ普遍史的な読み方（とりわけラッセル、コプルストン、ガーディナー）によって、普及させられたものである。このような解釈の流派は、今日に至るまで、多くのショーペンハウアー読者や哲学史家の、先入観と期待の地平を形作ってきた。もちろん、ショーペンハウアー自身も、[L1] が帰結したことに関与していないわけではない。ショーペンハウアーは、一八三〇年頃までの前期の著作においては、はっ

きりと [L2] の立場を支持して著作を書いていた。それにもかかわらず、一八三〇年から一八五五年にわたる自らの著作の改訂や補完、変更のなかで、同時代の後期観念論の [L1] の動向へと、接近したのである。そして、もともとの立場である [L2] へと再び向かったのは、自らの死の直前のことであった。[32]

ここで扱っているテーマと様々な点で関わるような逆説的な解釈状況が、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインの関係の研究のうちに存在している限り、前述のような相反するショーペンハウアー像を考慮することが重要となる。表1で「世界／表象主義」へとまとめられた研究のほぼすべてが示すように、ヴィトゲンシュタインの素朴なショーペンハウアー受容は、[L2] と一致していることが極めて多い。[33] だがその一方で、すぐに気づかれるように、両者の関係を扱っている研究者のほぼすべてが、[L1] になれ親しんでいる。この二つの読み方は、[L1] からみれば、相互に相いれず矛盾するはずであろう（右記参照）。それにもかかわらず、これまでの研究者たちは、[L2] を [L1] へと組み入れようとしているのである。このような方法から帰結するのは、もはやヴィトゲンシュタインのショーペンハウアー受容とも一致しなければ、ショーペンハウアー研究にとって重要ないずれの読み方とも一致しないような、まったく奇妙なショーペンハウアー像である。

さて、この関係の研究のもつ決定的な方法論的問題を指摘したところで、[GdB] が見出されると思われるショーペンハウアーの著作へとそのまま立ち入ろうとするに先立って、簡単に二つの問題を検討しておきたい。この二つの問題は、相互に緊密に連関しあっている。また、[RdS] と [GdB] を対立する立場として理解する一方で（第二節を参照）、

[L2] を [RdS] と同一視している読者にとっては、正当なものであると考えられる。

問題1 私の中心テーゼにしたがえば、[GdB] が見出されると思われるショーペンハウアーの著作は、ショーペンハウアーが明らかに [L2] の立場を支持していた時期のものである。だがその一方で、[L2] は表象主義の理論に与するものである。この表象主義の理論は、その定義からして、[RdS] を支持して、[GdB] を排除する。その場合、そもそも [L2] にしたがいつつ、当該著作が [GdB] のヴァリアントを含みうることが、いかにして可能なのか、という疑問が生じる。この問題は、ショーペンハウアーの著作における方法と内容を、より厳密に区別することによって、解消される。[34] [L1] と [L2] という二つの読み方の区別もまた、この区別によることで、目下の研究にとって、はじめて判明なものとなった。[L2] が基づいているいくつかの引用のなかで、ショーペンハウアーが主張しているのは、すべての哲学の目標とその方法が、「抽象概念における世界の十全な反復、いわば抽象概念における世界の映し出し」だということである。[35] この方法は、[RdS] をはっきりと思い出させるものであり、[GdB] への余地は残していない。さて、ショーペンハウアーのWWVが、[RdS] を用いて、すべての実在的かつ観念的な世界の事実を、すなわち「意志としての世界」(実在論) と「表象としての世界」(観念論) を、模写したとされるならば、そして、[RdS] と [GdB] を含んだ言語および言語理論が、前述の事実のもとに包摂されるならば、ショーペンハウアーのWWVは、その [RdS] という方法によって、[GdB] のような世界内容をも、模写していなければならない。簡潔に言えば、[L2] にしたがったときのショーペンハウアーのよ

うな表象主義者は、[GdB] のような使用理論を論ずることができる場合でも、この使用理論を哲学の方法として適用する必要はないのである。

問題2 標準的な解釈によれば、後期ヴィトゲンシュタインは [GdB] を支持しており、[RdS] に基づいていた前期ヴィトゲンシュタインを、批判したとされる。その場合、ショーペンハウアーは、前期ヴィトゲンシュタインか後期ヴィトゲンシュタインの、いずれかにしか影響を与えることができなかったことになる。しかし、もし彼がどちらのヴィトゲンシュタインにも影響を与えたとしたら、彼の哲学は [GdB] と [RdS] のどちらも含むことになり、それゆえ矛盾したものとなる。しかし、もしショーペンハウアーが、前期と後期のヴィトゲンシュタインに、自己矛盾に陥ることなく影響を与えられたならば、[L2] は納得できるものとなりうる。ショーペンハウアーがとりわけWIの§15で述べる方法論的な次元においては、[RdS] のヴァリアントが用いられている。これが恐らくは前期ヴィトゲンシュタインに近いものであることは、ここで言語の単語が、たんに実在的な対象にとどまらず、意見や思想、世界観などのような、観念的な事実をも名指していることに、みてとれる。[36] 内容的な次元においては、すなわち世界の、あるいはむしろ表象としての世界の構成要素に関しては、ショーペンハウアーはWIの§9のなかで、とりわけ言語と言語理論について語っている。いまや、[RdS] に焦点を当てた§15における方法論的な説明と、表象としての世界、またそれゆえに「言語」を主題化した、§9における内容的な叙述のあいだには、区別があることが明らかとなった。この区別に基づけば、[GdB] を [RdS] に組み込んだ前期のショーペンハウアーを、[RdS] を支持していた前期ヴィ

トゲンシュタインのみならず、[GdB] だけを支持していた後期ヴィトゲンシュタインとも結びつけることが、基本的に可能となる。したがって、少なくとも理論上は、言語哲学的な見立てのもとでは、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインは、両立することが可能なのである。

三・二　ショーペンハウアーの「大論理学」と、そのヴィトゲンシュタインへの考えられうる影響

すでに第二節で概観したように、先に言及したWWVの§9において、ショーペンハウアーが[RdS] の厳密なヴァリアントを支持していないことは、両者の関係を扱った様々な研究者たちによって、たしかに見出されていた。しかし彼らは、[GdB] のヴァリアントの明確な裏づけを、示すこともできていなかった。私は、この研究結果が§9を正しく示したものだと信じている。とはいえ、ショーペンハウアーと後期ヴィトゲンシュタインの両立可能性について、いま述べた論証は、無意味ではなかったはずである。というのも、第四節で明らかとなるように、ショーペンハウアーが [GdB] に論究しているのは、論理学的な関心からなる両者の関係の研究が今日まで引き合いに出してきた、WWVの§9でもなく、この節の拡大箇所だからである。その拡大箇所というのは、「大論理学」と呼ばれ、彼の『講義草稿』に見出されるものである。一八二〇年代から三〇年代にかけて、ショーペンハウアーは、一般に哲学に関心をもつ読者へ宛てられた自らの主著（WWV）を、大学の聴講者のために改訂した。そして、このような理由から、WWVの§9の「小論理学」と「小議論学」を、大規模な議論学への最初の構想を含む「大論理学」へと、拡大したのである。

ところで、この大論理学が言語哲学の歴史にとって興味深いのは、たんにここで立てられたテーゼのみならず、記号論理学についての恐らくは最も詳細な叙述を、ジョン・ベンによる同名の著作『記号論理学』よりも先に、活字にしておよそ一五〇頁にわたって行っているという事実である。エンゲルやヴァイマー、そしてとりわけグリフィスといった研究者たちが繰り返し指摘してきたように、ヴィトゲンシュタインもまた、ショーペンハウアーを読むにあたって、恐らくWIの§9における「小」記号論理学に関心を持っていたと考えられる。[37] そのことの証拠とグリフィスが見なす一例として、一九一四年における、[38] 記号論理学についての、ヴィトゲンシュタインのちょっとしたメモがある。この一九一四年という時期が、ヴィトゲンシュタインがショーペンハウアーの著作を改めて読んでいたと考えられる時期に相当することは、マギーやジャナウェイ、ランゲが説得的な仕方で裏づけることができた通りである。[39] 同じく、すでに第二節で言及したように、エンゲルはWWVの§9における小議論学に基づいて、ヴィトゲンシュタインは大議論学を模索し見いだしていたと考えられるという、研究上の仮説を立てていた。たしかにこの大議論学（『論争術』あるいは『正当性を保つ術』として知られている）は、大論理学と同じく、ショーペンハウアーの遺稿のなかにもみられるものの、いま我々の関心を引いている『講義草稿』のなかには、その後にさらに完成される議論学の、最初の構想が含まれているにとどまる。

ショーペンハウアーの大論理学と後期ヴィトゲンシュタインの哲学のあいだに、内容的・体系的な並行関係があることを示すことのほうが、この私の研究においてはより重要なことである。しかしながらこの節では、歴史的な影響研究からみて重要な問題を、すなわち、そもそもヴィトゲンシュタインは大

議論学と大論理学を読むことができたのか、という問題を、残しておかないようにしたい。この問題には、いずれの場合についても、「イエス」と答えることができる。エンゲルが後期ヴィトゲンシュタインの哲学との並行関係を浮き彫りにした大議論学のほうは、ユリウス・フラウエンシュテット編集の『アルトゥール・ショーペンハウアーの遺稿』のもとで、一八六四年にライプツィヒで出版された（同書三-三六頁）。約三〇頁にわたる議論学の第二版は、ヴィトゲンシュタインの死後に初めて出版されたが、大論理学の公刊は一九一三年に、すなわちヴィトゲンシュタインの日記にショーペンハウアーとダイアグラムについての暗示が現われる約一年前になされている（左記参照）。

明らかに統語論的な借用がある場合を別にすれば、著者Yがかつて著者Xを読んで影響を受けたかどうかは、たしかに歴史的には決して厳密には証明できない。しかし、ヴィトゲンシュタインが論理学に関して自分の好みの著者の本だけを選択的に読んでいたという、エンゲルの言葉が正しいとすれば、ヴィトゲンシュタインが大議論学より先に大論理学に出会ってすらいたことの、証拠と理由を、いくつか挙げることができる。この証拠ないし理由として挙げられるのは、次の四つである。**1**. 出版上の理由。一九一三年の版は、一八六四年のものより発行部数が多く、より容易に入手することができる。**2**. 歴史的な因果関係による理由。ヴィトゲンシュタインによるショーペンハウアーとダイアグラムの暗示は、一九一四年ごろに増加する。**3**. 哲学的な理由。エンゲルが強調した両者の数々の類似性は、大論理学における議論学の構想をもカバーしうるものである。そして最後に、**4**. 視覚的な見つけやすさによる理由。遺稿を通覧したとき、大論理学のなかでもオイラー図のある一五〇頁は、すぐに目に留

まる。[41] しかし、これらの証拠と理由はすべて、歴史的な影響としては、結局のところスペキュレーションに留まる。また、*PU*の中心テーゼを、ショーペンハウアーの『遺稿』のわずかな断片へと還元するなど、不遜なことだと思っている。それゆえ、まずは純粋に内容的・体系的な並行関係に取り組んで、ショーペンハウアーの表象主義が、意味論的な使用理論と文脈主義を排除しないことを示すよう専念したい。とはいえ、以下の節の歩みにおいて、比較のための第三項が開けることになる。これによって第五節では、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインが似たような言語哲学的な見立てを支持していたことが、哲学史の不思議な偶然などではないことの理由を、説明できると信じている。

四. ショーペンハウアーの意味の使用理論と文脈原理

第二節と第三節の結論を簡単にまとめよう。ショーペンハウアーの［GdB］は、［KTP］とともに、大論理学のなかにあると思われる。このいわゆる「大論理学」は、ショーペンハウアーが一八二〇年から三〇年の一〇年のあいだに行う予定だった『講義草稿』の一部であり、それゆえにこの講義草稿は、明らかにショーペンハウアーが経験的・表象主義的だった時期にあたっている。ショーペンハウアーにおける表象主義は、方法論的な見立てを支持するものであり、それによって「世界の全本質を抽象して、一般的かつ判明な仕方で概念において再現する」[41]ものである。しかし、ショーペンハウアー哲学における概念が、実在的な対象と観念的な事実を映しだす機能をもつからといって、概念の意味は哲学において表象するという目的の手段となること

に尽きるとまで、ショーペンハウアーが信じていた、ということにはならない。それゆえ、ショーペンハウアーが自らの表象理論とは別に、意味論的な使用理論や文脈主義を主題化し、それどころか支持したということは、ありうることなのである。たしかに、研究の中でもこのテーゼは、エンゲルやヘッケル、チャーチル、そしてとりわけジャニクによって支持されているものの、その裏づけの不十分さゆえに、シュレーダーからは批判されている。これに対してヴァイマーは、ショーペンハウアーが意味論の問題（例えばクワインの翻訳の問題）においてさえ、なおも［RdS］を支持していたのだと信じている。そのうえシュレーダーは、ショーペンハウアーが意味の問題を、またそれゆえに［GdB］を、知らなかったのだと信じている。この節では、ショーペンハウアーの引用によって、ヴァイマーとシュレーダーの主張の誤りを論証するつもりである。

大論理学からの当該の引用の文脈においては、ショーペンハウアーは、意味と言語の習得というテーマを扱っている。このテーマは、何よりもまず、あらゆる点で、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインのあいだの比較のための第三項を形成するものである。というのも、一般的な次元において、ショーペンハウアーの講義草稿には、*PU*の最初の一節との体系的な並行関係がすでに認められ、そこでは［GdB_w］と、さらに後には［KTP_w］が、言語学習というテーマと、密接に結びつけられているのである（キーワードとしては、「訓練」「指さして単語を教える」[v]「言葉のレッスン」[vi]などがある）。しかし、より個別的な次元においては、軽い相違がみられる。というのは、ヴィトゲンシュタインがとくに子供における言語学習を引き合いにだすのに対して（とくに*PU*の§5より）、ショーペンハウアーは、外国語学習および、それと結びついた翻訳の問

題に基づくことで、単純な記号の組である単語がいかにして意味内容をもつ概念となるのかという問題に、関わっているのである。したがって、ショーペンハウアーが論じているテーマはまさに、彼は知らなかったのだとシュレーダーが信じ、ヴァイマーに至っては［RdS］によってしか答えられなかったとすら信じていた、その当のものなのである。さて、これに反して、私が信ずるに［KTP］と一緒に［GdB］のヴァリアントを含む、ショーペンハウアーの引用は、この外国語習得という文脈においては、次のようなものとなっている。

(Z.5)それゆえ、外国語の単語の真の価値は、(Z.6)辞書によって学ばれることはないのであり、それを用いることによって、はじめて学ばれるのであり、(Z.7)古典語の場合は読むことによって、近代語の場合は、話すことと、(Z.8)その国に滞在することによって、その単語の真の価値が学ばれる。[vii]つまり、その単語が見いだされるところの、異なる(Z.9)連関によって、はじめて(Z.10)その単語の真の意味が抽象され、(Z.11)その単語が指示する概念が見いだされるのである。(42)

この引用をより詳細に論じるために、引用元の一九一三年のモクラウアー・ドイッセン版から行番号（以下Z.）を借りてきて、その数字を引用のなかの各行の上部に付した。私のテーゼにしたがえば、この引用は、［GdB］に加えて、［KTP］のヴァリアントを含んでいる。［GdB］のヴァリアントは、Z.5～8に認められる。また、［KTP］のヴァリアントは、Z.8～11に認められ、句点[viii]のあとから始まる。この句点[ix]と、それに続く「つまり」は、［KTP_s］が［GdB_s］の基礎づけないし正当化をなすことを指示している点で、示唆に富んだものである。ショー

ペンハウアーが、この理論と根拠づけの編み細工によって、[GdB] と [KTP] のあいだに設けている区別は、多くのヴィトゲンシュタイン研究者がしている以上に、細かなものにすら思われる。というのも、PUの§43と§49における当の [GdB_W] と [KTP_W] の命題を、研究文献のなかで等置しているさまに、何回も出くわしてきたからである。しかし、ここまでは、ショーペンハウアーの引用のもつ、大まかな構造と興味深い側面について、論じてきたにすぎない。さて本当のところ、この引用から実際に [GdB_S] と [KTP_S] を読み取ることは、どのようにして正当化されるのであろうか？

四・一　ショーペンハウアーの「意味の使用理論」(GdB_S)

まずは、Z.5～8における [GdB_S] に、話を進めることにして、Z.5の「それゆえ」と、またそれゆえ引用の文脈については、当面は無視することとする。本来のテーゼ、つまり [GdB_S] は、次のようなものである。「外国語の単語の真の価値は、それを用いることによって、はじめて学ばれる」。「用いることによって」という語が示唆するように、ここでは明らかに、「言語」の使用が問題となっている。ショーペンハウアーが、ほかならぬ外国語学習における言語の使用を、どのように捉えているかについては、次の具体例にはっきりと示されている。すなわち、古典語の場合には、その使用は、受動的に読むことを旨としており（Z.6f.）、近代語の場合には、能動的に話すことを旨とする（Z.7f.）。ところで、なぜここで問題にされているのが、意味論の理論であって、例えば人間は言葉を用いるとか、「単語の価値」は感性的なものだといった、たんに些末な確認というわけではないのか、という点を裏づけることの方が、いささか困難であろうと思われるか

もしれない。しかし実際には、これが意味論の理論であるということの、多くの裏づけと証拠が、認められるのである。(1)この引用の文脈によって、より明確に示されているものの、Z.5の「単語の真の価値」とZ.10の「真の意味」という表現が相互に交換可能であることを指摘するだけでも十分である。(2)さらに、意味という概念の代わりに、価値というメタファーを用いることは、意味論の理論においては、今日に至るまで、ドイツ語圏では慣例である。その証拠となる例として、ローレンツ・プンテルにおける、文脈原理のパラフレーズが挙げられる。それによれば、「言語的な表現は、文の連関においてのみ、意味論的な価値をもつ」[43]。(3)三つ目の証拠は、現物の手稿を引き合いに出すことで、明らかとなる。この手稿のなかで、ショーペンハウアーは、まず「概念」と書いたうえで、それを取り消し線で消して、「真の価値」という言葉に置き換えている。[44]

ここで注意するべきは、ショーペンハウアーがほとんどすべてのテキストにおいて、単語と概念を厳密に区別していることである。意味をもつのは概念であり、単語は「概念の感性的な記号」である。そのことは、数字が数の記号であるのと同じである。[45] それゆえ、手稿におけるこの訂正が示しているのは、「単語の真の価値」という表現が、もともとは単語の概念を、またそれゆえに単語の意味内容を、意味していたということである。(4)これにとどまらず、さらなる解釈戦略も取って、ショーペンハウアーはZ.5以降において、[GdB] と [RdS] のあいだに、境界線を引こうとさえしているのだと、示すことも可能である。このテーゼは、ヴァイマーの主張の誤りを、完全に論証するものであると考えられる。というのもショーペンハウアーは、とりわけ以下の強調句によって、[RdS] を否定している。「外国語の単語の真の価値は、辞書によっては学ばれることは

ない」。ヴィトゲンシュタインやクワインにおけるのと同様、ここでも［GdB］と［RdS］のあいだの境界は、分かりやすいものでも、はっきりとしたものでもない。「辞書によって」というショーペンハウアーの表現が意味しているのは、まだ意味内容を知らない外国語の単語を、すでに意味を知っている得意な言語の概念によって表象する、ということであると考えられる。しかし、この引用の文脈におけるショーペンハウアーのテーゼによれば、異なる言語の概念は、意味論的には決して（記号外延論理学の意味において）完全に同値ではない。「それゆえに」、ショーペンハウアーによれば、「辞書においては、ある言語の単語はたいてい、他の言語のいくつかの単語によって説明される」のである。[46] その例として、ショーペンハウアーは、「誠実（honestum）」というラテン語の単語を引き合いに出す。この単語の意味の外延と概念領域は、

例えば徳（Tugend）、名誉ある（Ehrenvoll）、立派な（anständig）、敬うべき（ehrbar）、礼儀正しい（geziemend）[x]、褒めるべき（rühmlich）、といった何らかのドイツ語の単語によって支持される概念の領域によっては、決して同心円上に重なりあうことができない。これらの単語はすべて、同心円状ではなくて、以下のようにして重なっている。[47]

ここでショーペンハウアーが、辞書的な学習を［RdS］と完全に同一視することで、［GdB］とのあ

いだに境界線を引こうとしていることは、以上の説明からすでに明らかになったと考えられる。このようなショーペンハウアーの引用と、［RdS］への疑いを表現した*PU*のテキスト箇所とのあいだの並行関係は、数多くみられる。大議論学に関するこのような並行関係は、すでにエンゲルが概観していた。同じく、*PU*の27によれば、「人の名前を指さして説明している」ときに、「それが色の名前であるとか、人種の名前であるとか、方角の名前だとか思われてしまうこともあるかもしれない」[xi]。それと同じように、ある言語の辞書的な学習の場合も、例えば「誠実（honestum）」が、完全に「徳（Tugend）」や「名誉ある（Ehrenvoll）」と同一視されて、この表象も他のすべての表象も、それが表象している当のものの意味を捉えていないことが、見落とされてしまうかもしれない。それゆえ、ショーペンハウアーによれば「概念はすべての文化において同じであるが、これに対して単語は異なっている」、とするヴァイマーの主張は、ショーペンハウアーが意味の問題を知らなかったであろうという、シュレーダーの見解と同様に、誤っている。それどころか、事情はその反対なのであり、ショーペンハウアーは意味論の問題を、オイラー図を用いることで、今日にいたってなお新しい方法で説明しているのである。

これに対して、ヴィトゲンシュタインとショーペンハウアーは、参照のない問題においても一致しているのではないか、という疑問が、エンゲルの論文によって生じうるかもしれない。というのも、ギリシャ語の「職人（banausos）」や「混沌（Chaos）」が、本来は他の言語のうちに辞書的に一致するものを持たないと、ショーペンハウアーが指摘するとき、そもそも言葉は常になにかと対応せねばならないかどうかを、「ノートゥング」という名前を用いて論じた、*PU*の§39が思い出されるであろうから

である。最終的には、ショーペンハウアーが辞書のイメージで説明する、[RdS] の枠組みによる言語の習得は、「博物館の比喩」というクワインの寓意や、「名札」あるいは「一覧表」というヴィトゲンシュタインのメタファーに、比肩しうるのではないかと、考えてみることさえできるかもしれない。というのも、ここまで論じたテキスト箇所からすでに見てとられるように、恐らくショーペンハウアーは、現代の（分析的な）言語哲学の三つの中心テーマを、相互に関連させているからである。その三つの中心テーマとは、使用理論、文脈原理、翻訳の問題である。

四・二　ショーペンハウアーの文脈原理（KTP_s）

それでは、Z.8～11における [KTP] へと話を進めよう。ショーペンハウアーの本来のテーゼ、すなわち [KTP_s] は、次のようなものである。「その単語が見いだされるところの、異なる連関によって、はじめてその単語の真の意味が抽象される」。ここで明らかに文脈原理のヴァリアントが叙述されていることは、「連関」という表現だけからも暗示されており、これを助けとすることで、「単語」の「真の意味」にも目がとまる。しかし、文脈原理のどのヴァリアントをショーペンハウアーが意図していたのか、という問題に対する明瞭な答えは、Z.9からは得られない。とはいえ、いくつかのヴァリアントは、排除される。[48] (1)クワインが扱っている意味での全体論的な文脈原理においては、文はある理論の連関においてのみ意味をもつとされるが、[49] このヴァリアントが問題とされているわけではない。そのことは、ショーペンハウアーが文脈主義を単語へと限定していることによって（Z.9）、はっきりと確定できる。(2)次に、引用に登場する「その国に滞在すること」という表現に依拠することで、ショーペンハウアーは社会的フィールドワークという形式による、総じて状況依存的な言語連関を意図していたのだ、と推測できるかもしれない。この種の行動主義的な文脈原理は、多くの解釈者がクワインのガヴァガイの例から読みとってきたものであるが、ショーペンハウアーの場合には、Z.5～8の文法的な解釈ミスによるものであると考えられる。「その国に滞在すること」という表現は、読点[xii]が打たれることで、明らかに「話すこと」と同格の関係になっている。それゆえ、この表現の役割は、近代語が（古典語と比べて）ネイティブスピーカーとのコミュニケーションによって習得されることができる、あるいはそれが望ましいことでさえある点に、注意をうながすことにすぎない。

全体論的・行動主義的な見立てが排除されるにとどまらず、前述の同格の関係が指摘されたことによって、ショーペンハウアーは言語論理学的な文脈主義を支持しているのだという疑いが、確実なものとなる。というのも、[KTP_s] は次のようにして有効なかたちで厳密化できるからである。「読んだり話したりする際に、その単語が見いだされるところの、異なる連関によって、はじめてその単語の真の意味が抽象される」。それゆえ、クワインやヴィトゲンシュタイン、フレーゲに比べると、たしかに命題的な連関範囲（理論、文、文成分）は、厳密に規定されてはいない。私見では、これは [KTP_s] の欠点であると見なしうる。単語の意味内容が一義的に規定されるためには、この連関範囲のなかに単語が埋め込まれなければならない。しかしここでは、より大きい連関範囲が、より小さい意味論的な単位へと落とし込まれており、そのことを証言しているのが、「抽象する」という表現なのである。[50]

最後に、次のことを注意しておきたい。ショーペンハウアーはこの箇所で、[KPP] に反論している

わけではない。むしろ、一九世紀においては珍しいことではないが、ショーペンハウアーは、[KTP]を意味論の基礎づけに限定したうえで、[KPP]を教授法として論理学の構築へと投入しているのである。[51] 第二節の冒頭で概観した通り、例えばブランダムのようなプラグマティストは、[KPP]と[KTP]を、互いに取って代わるべき理論、あるいは競合する理論として、対立させていた。というのも、彼らの見解によれば、伝統的論理学は、[RdS]によって、直観および／あるいは概念の次元へと高められて、次にこの意味論の理論は、[KPP]によって、判断と推論へと転じられるからである。しかし、これに対して、意味論的な理論、すなわち[GdB]と[RdS]に加えて、見かけ上はそれらの原理であるもの、すなわち[KTP]と[KPP]もまた、対立へともたらされる必要はないのである。そのことの一例として、ショーペンハウアーは、寄与することができると考えられる。

五．結論と展望[xiii]

ショーペンハウアーは、遺稿のなかの『講義草稿』において、言語の使用理論（GdB）を支持しており、この使用理論を、文脈原理（KTP）によって基礎づけている。そのことを、以上の論考において、説得的に説明できたことを願っている。それによって、ショーペンハウアーによる論理学の言語内在的な解釈が、ヴィトゲンシュタインの立場の完全な先取りであるという、ジャニクの懐深くみえるテーゼが、少なくともそれなりに市民権を得たことと思う。また一方では、シュレーダーとヴァイマーの見解を斥けるための、二つの裏づけを提示したつもりである。

二人の批判者のうち、ショーペンハウアーの言語哲学の「不十分さ」を、最も力強く主張していたのは、ヴァイマーであった。ヴァイマーの主張によれば、例えばクワインにおいて見出されるような翻訳の問題が、ショーペンハウアーにおいては存在しないとされていた。仮にショーペンハウアーがこの問題を論じたとしても、彼が支持しえたのは、言語の表象理論（RdS）と、ひいては合成原理（KPP）だけであったことであろう、と。私が第四節において示そうとしたのは、ショーペンハウアーが翻訳の問題を知っていたこと、そして、ヴァイマーの推測とは正反対の仕方で、彼がこの問題を扱っていたということであった。

シュレーダーの支持したテーゼは、ヴァイマーよりも一般的なものであり、ショーペンハウアーは意味論についてのロックの問題には理解が及ばなかったのだと考えていた。ショーペンハウアーのような本の虫が、このような問題を見落としており、その反対に、ヴィトゲンシュタインのような歴史嫌いな哲学者だけが、ロックを通じてこの問題に注意を向けたというのは、そもそもシュレーダーによるロックへの暗示が、そのようなことを意味しているとしたら、そのような可能性に関しては、一般に疑念を呈しうる。むしろ、第四節で示したように、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインのいずれにおいても、[GdS]と[KTP]は、言語と意味の習得についての教授理論のなかに、包摂されていたのである。二人の教授理論の相違は、ロックを読んだ可能性を引き合いに出さずとも、たんに伝記的な観点から、説明することができる。ヴィトゲンシュタインもショーペンハウアーも、修得済みの母語に固有の意味論的な言語記憶を度外視しているわけでも、言語習得の固有のプロセスを発生論的なしかたで再構成しているわけでもない。どちらかといえば、幼い生徒と言語的に自立した教師のあいだでコミュニケーションがなされる状況のなかで、往年の田舎教

師のあたまのうちに、意味の問題が否応なしに浮かんでおり、かたや外国語の（独）学徒が、言語習得の能動的・受動的なプロセスを通じて、意味論の問題に慣れ親しむにいたった、といったところであろう。しかし、この二人の思想家は、もし互いの立場が正反対の境遇だったとしても、すなわちショーペンハウアーは教師という役割のなかでも、そしてヴィトゲンシュタインは外国語教師であったとしても、意味論の問題を発展させることができたと考えられる。そのことは、少なくとも*PU*の32と、ジャニクが挙げたショーペンハウアーの学位論文における子供の言語習得についての一節によっても、裏づけられている。

予告していた通り、第三節で投げかけた、両者の影響関係についての問題に、再び戻ることにしよう。ヴィトゲンシュタインは、*PU*の冒頭で、[RdS]および[KPP]を、アウグスティヌスの短いテキスト断片から導き出していた。それと同じように、[GdB]と[KTP]を、ショーペンハウアーのわずか数行の記述をもとに発展させることができたというのは、考えられえないことではない。しかし、ショーペンハウアーによる、このような歴史的影響を想像するのは、説得的でもなければ、理に適ってもいない。ヴィトゲンシュタインの意味論の理論がロックやショーペンハウアーに由来するという想定、つまり通常[KTP$_w$]がフレーゲへと帰されるのと類比的な想定をするよりも、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインのいずれもが、互いに独立に自ら[GdB]を発展させ発見したのであり、実際の外国語習得をめぐる似たような経験に基づくことで、体系的な共通性を示しているのだ、と推測をするほうが、より納得ができる。

以上の論考は、多くの問いを残したと考えられる。例えば、ショーペンハウアーの著作のなかに、

[GdS]と[KTP]のさらなる足跡はあるのであろうか？その足跡は、ヴィトゲンシュタインとどの程度まで一致するであろうか？より厳密な問い方をするならば、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインのあいだの類似点と相違点は、どこまでならば手堅く正当化できるのか、そのためには、両者の解釈についてどのような前提を認めなければならないのか？ショーペンハウアーが辞書的翻訳と呼ぶ問題や、それにともなう[RdS]への彼の批判は、クワインやデイヴィッドソンの扱った翻訳の問題を、どの程度まで先取りしていたのか？これらの問いは、ただ「論理学」および「言語哲学」の領域にのみ相当する。だから、私が信ずるに、ジャニクの書いた意見は当たっていないわけである。いわく、「ヴィトゲンシュタインとショーペンハウアーの関係を厳密に述べるためには、もっと分厚い本が必要となったことであろう」[52]。

（おおた　ただひろ＝京都大学大学院
文学研究科 西洋近世哲学史専修 博士後期課程）

＊本稿は、二〇一六年に刊行されたSchopenhauer-Jahrbuch, (Hrsg.) Matthias Koßler, Dieter Birnbacher, Band.97, S.171-195に掲載されているJens Lemanski: „Schopenhauers Gebrauchstheorie der Bedeutung und das Kontextprinzip: Eine Parallele zu Wittgensteins *Philosophischen Untersuchungen*“の翻訳である。

文献表

Anscombe, G. E. M. (1959): *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus*. Philadelphia.
Brandom, Robert (2001): *Articulating Reasons. An Introduction to Inferentialism*. 2. Aufl. Cambridge/Mass.
Cakmak, Cengiz (2003): Schopenhauer & Wittgenstein. The

Unsayable. In: *Philosophical Inquiry* 25: 1/2, 115-124.

Canfield, John V. (1996): Wittgenstein versus Quine. The Passage into Language. In: *Wittgenstein and Quine*. Hrsg. v. H.-J. Glock, R. L. Arrington. London, 116-144.

Churchill, John: Wittgenstein's Adaption of Schopenhauer. In: *The Southern Journal of Philosophy* 21 (1983), 489-502.

Clegg,. Jerry S. (1978): Logical Mysticism and the Cultural Setting of Wittgenstein's Tractatus. In: *Jb.* 59, 29-47 [Übers.: Der logische Mystizismus und der kulturelle Hintergrund von Wittgensteins „Tractatus". In: *Schopenhauer*. Hrsg. v. J. Salaquarda. Darmstadt 1985, 190-218].

(1988): Schopenhauer and Wittgenstein on Lonely Languages and Criterialess Claims. In: *Schopenhauer. New Essays in Honor 0/ His 200th Birthday*. Hrsg. v. E. v. Luft. Lewiston u. a., 82-100.

Davidson, Donald (1967): Truth and Meaning. In: *Synthese* 17:1,304-323.

De Cian, Nicoletta/Segala, Marco (2002): What is Will? In: *Jb.* 83, 13-43.

Engel, S .. Morris (1969): Schopenhauer's Impact on Wittgenstein. In: *Journal of the History of Philosophy* 7:3, 285-302 [Repr.: *Schopenhauer. His Philosophical Achievement*. Hrsg. v. M. F. Brighton 1980, 236-254].

Gardiner, Patrick: *Schopenhauer*. Harmondsworth 1963.

Glock, Hans-Johann (1999): Schopenhauer and Wittgenstein. Representation as Language and Will. In: *The Cambridge Companion to Schopenhauer*. Hrsg. v. C. Janaway. Cambridge, 422-458.

Goodman, Russell (1979): Schopenhauer and Wittgenstein on Ethics. In: *The Journal of the History of Philosophy*, 437-447.

Griffiths, A. Phil1ips (1973): Wittgenstein, Schopenhauer, and Ethics. In: *Royal Institute of Philosophy Lectures* 7, 96-116 [Repr.: *Understanding Wittgenstein*. Hrsg. v. G. Vesey.Ithaca 1974, 96-116].

(1976): Wittgenstein and the Four-Fold Root of the Principle of Suffucient Reason. In: *Aristotelian Society: Supplementary Volume* 50:1-2, 1-20.

Hacker, P. M. S. (1986): *Insight and Illusion. Themes in the Philosophy of Wittgenstein*. Überarb. Aufl. Oxford.

Hallett, Gareth (1977): *Companion to Wittgenstein's Philosophical Investigations*. Ithaca.

Han, Linhe (2002): Wittgenstein and Schopenhauer. In: *Wittgenstein and the Future of Philosophy. A Reassessment after 50 Years/Wittgenstein und die Zukunft der Philosophie. Eine Neubewertung nach 50 Jahren*. Hrsg. v. R. Halle, K. Puhl. Wien, 112-121.

Janaway, Christopher (1989): *Self and World in Schopenhauer's Philosophy*. Clarendon.

Janik, Allan S. (1992): Wie hat Schopenhauer Wittgenstein beeinflußt? In: *Jb.* 73,69-78.

(1982): On Schopenhauer's Relationship to Wittgenstein. In: *Zeit der Ernte. Studien zum Stand der Schopenhauer-Forschung*. Hrsg. v. W. Schirrmacher. Stuttgart-Bad Cannstatt, 271-279.

(1985): Schopenhauer and the Early Wittgenstein. In: Ders.: *Essays on Wittgenstein and Weininger*. Amsterdam, 26-48 [Orig.: *Philosophical Studies* xv (1966), 76-95].

Janssen, Theo M. V. (2012): Compositionality. Its Historic Context. In: *The Oxford Handbook of Compositionality*. Hrsg. von M. Werning, W. Hinzen, E. Machery. Oxford, 19-46.

Lange, Ernst Michael (1989): *Wittgenstein und Schopenhauer. Logisch-philosophische Abhandlung und Kritik des Solipsismus*. Cuxhaven.

Lemanski, Jens: Die neuaristotelischen Ursprünge des Kontextprinzips und die

Fortführung in der fregeschen Begriffsschrift. In: *Zeitschrift für philosophische Forschung* 67:4 (2013),566-587.

Lovejoy, Arthur O.: Schopenhauer as an Evolutionist. In: *The Monist* 21:2, 195-222.

Magee, Bryan (1983): *The Philosophy of Schopenhauer*. Oxford.

Millet, Julián Marrades (2011): Subject, World and Value (Some Hypotheses on the Influence of Schopenhauer in the Early Wittgenstein). In: *Doubt, Ethics and Religion. Wittgenstein and the Counter-Enlightenment*. Hrsg. v. L. Perissinotto, V. Sanfelix. Heusenstamm, 63-83.

Pears, David (1987): *The False Prison. A Study of the Development of Wittgenstein's Philosophy*. Bd. 1. Oxford.

Puntel, Lorenz B. (1990): *Grundlagen einer Theorie der Wahrheit*. Berlin/New York.

Quine, W. V. (2002): Epistemology Naturalized. In: *Knowledge and Inquiry*. Peterborough/Ont., 245-261.

(1968): Ontological Relativity. In: *The Journal of Philosophy* 65:7, 185-212.

(1963): Two Dogmas of Empiricism. In: *From a Logical Point of View*. 2. Aufl. NewYorck u. a., 20-47.

Schopenhauer, Arthur (1911): *Die Welt als Wille und Vorstellung. Erster Band*. München (= Sämtliche Werke. Hrsg. von Paul Deussen. Bd. 1).

(1913): *Handschriftlicher Nachlaß. Philosophische Vorlesungen. Erste Hälfte. Theorie des Erkennens*. Hrsg. v. F. Mockrauer. München (= *Sämtliche Werke*. Hrsg. von Paul Deussen. Bd. 9).

Schroeder, Severin (2012): *Schopenhauer's Influence on Wittgenstein. In: A Companion to Schopenhauer*. Hrsg. v. B. Vandenabeele. Chichester u. a., 367-385.

Schubbe, Daniel/Lemanski, Jens (2014): Konzeptionelle Probleme und Interpretationsansätze der Welt als Wille und Vorstellung. In: *Schopenhauer-Handbuch*. Hrsg. v. D. Schubbe und M. Koßler. Stuttgart, 36-44.

Tejedor, Chon (2011): The Ethical Dimension of the Tractatus. In: *Doubt, Ethics and Religion. Wittgenstein and the Counter-Enlightenment*. Hrsg. v. L. Perissinotto und V. Sanfélix. Heusenstamm, 85-103.

Weimer, Wolfgang (1995): Ist eine Deutung der Welt als Wille und Vorstellung heute noch möglich? Schopenhauer nach der Sprachanalytischen Philosophie. In: *Jb*. 76, 11-53.

Weiner, David Avraham (1992): *Genius and Talent. Schopenhauer's Influence on Wittgenstein's Early Philosophy*. Rutherford.

Wittgenstein, Ludwig (1984): *Werkausgabe in 8 Bänden*. Hrsg. v. R. Rhees. Frankfurt a. M.

Worthington, B. A. (1981): Ethics and the Limits of Language in Wittgenstein's 'Tractatus'. In: *Journal of the History of Philosophy* 19,481-496.

《原註》

(1) 第二節を参照。

(2) Glock 1999.

(3) PU, 43.

(4) Frege 1884, 73（§62）、および X. ――ヴィトゲンシュタインはPUの 49 においてフレーゲの定式を引用しているので、[KTP_F] ＝ [KTP_W] となる。

(5) 例として、Brandom 2001、特に 7ff., 12ff., 80, 124ff. を参照。

(6) PU, 1.

(7) Quine 1968, 185, 187 を参照。

(8) Canfield 1996 を参照。これ以降、ヴィトゲンシュタインとクワインを比較する際の、術語および内容に関しては、この論集から引用する。

(9) Quine 2002, 247 を参照。

(10) Janssen 2012; Lemanski 2013 の研究サーベイを参照。

(11) この友人の証言としては、Janik 1875 にみられるものが、完全ではないが、最大のものである。ショーペンハウアーのどの著作を、ヴィトゲンシュタインが受容していたかは、これらの証言からは、正確には分からない。

(12) 例としてMs. 154, 15^{v}-16^{r}（＝ Wittgenstein 1984, Bd. 8, 476）を参照。「思想の運動というものを、わたし［すなわちヴィトゲンシュタイン］がつくりだしたことなど、一度もないのではないだろうか。それはいつも、だれかほかの人から、もらってきたものにすぎない。わたしはただ、明晰化という自分の仕事のために、すべてを情熱的に、思想運動にとびついただけのことである。こうしてわたしは、ボルツマン、ヘルツ、ショーペンハウアー、スラッファから、影響を受けた」（邦訳は、丘澤静也訳『反哲学的断章』、青土社、一九八一年、五六頁、一部改変）。

(13) Glock 1999, 423f., 426; Magee 2002, 311 を参照。

(14) Hallett 1977, 799 を参照。Pears 1987 の、とりわけ 166 以下には、同じく示唆に関するリストがある。これは、同じ程度の長さであるが、脈絡が欠けている。

(15) Clegg 1988, 94f.を参照。

(16) Morris 1980, 287, Fn.8 を参照。

(17) Magee 2002, 326 を参照。

(18) Janik 1992, 72f.を参照。

(19) Glock 1000, 456f., Fn. 15 を参照。

(20) Schröder 2012, 378 を参照。しかし、シュレーダーの判定は、決定版とはならないと考えられる。というのも、例えばシュレーダーは、ヴィトゲンシュタインが「生活形式（Lebensform）」の概念をWI, §54 から借用したというエンゲルのテーゼに対して、原典のなかでは「生の形式（Form des Lebens）」しか出てこないことを理由に、もっともな疑念を呈しているが、他方で「生活形式」が少なくとも一度は主著（Bd.II, Kap. 25）に姿を現わしていることを、見落としているからである。

(21) Glock 1999, 424; Janik 1982, 275; Janik 1985, 31; Janik 1992, 76; Lange 1989, 2 を参照。

(22) Weimer 1992, 29. この理由については、S.19ff. で述べられている。

(23) Ebd., 21.

(24) Vgl. Engel 1969, 290f., 295 を参照。また、Weimer 1992

(25) Schröder 2012, 378 を参照。「言語を理解するとは、言語を心的イメージへと翻訳する過程である、という考え方を、ショーペンハウアーは否定している（WWR I, § 9）。このことが、両者の関係にとって、より興味深い点となっている」。シュレーダーは、[GdB$_{W}$] の独自性が脅かされないように、後期ヴィトゲンシュタインに対するショーペンハウアーの影響を否定するような論拠を集めていると、推測できるかもしれない。それゆえ、もう一度指摘しておくが、歴史上の思想家のあいだの体系的な並行関係を、剽窃の責めと混同するべきではない。またそれゆえ、前期および後期ヴィトゲンシュタインの理論的な業績は、その先駆者達とのあいだにいかなる並行関係があろうとも、損なわれることはない。

(26) ebd., 379 を参照。

(27) Schröder 2012, 379 を参照。これに加えて、次の点を注意しておきたい。シュレーダーが否定的な判断の証拠として挙げている、WI, § 9 からの引用は、Engel 1969, 295f. の見解によれば、ヴィトゲンシュタインの『青色本』のテキスト箇所に対する着想となったのではないかと考えられる。

(28) Janik 1992, 73f.

(29) Weimer 1992, 40ff. においては、この二人の著者の他のテキストを引き合いにだすことで、ショーペンハウアーとヴィトゲンシュタインのあいだの類似性を見いだしている。

(30) 以下の点については、Schubbe/Lemanski 2014 において、より一層詳細な説明を行っている。

(31) 例として、Cian/Segala 2002 の論文が、指標となる。

(32) ショーペンハウアーの「教説の変更」というテーゼは、すでに百年以上前に、Lovejoy 1911 によって支持されている。

(33) 本稿のモットーが示しているように、すでに Anscombe 1959, 12 が、二つの異なるショーペンハウアーの読み方を指摘していたが、この読み方は、今日のショーペンハウアー研究とも一致するものである。

(34) ヴィトゲンシュタインも、*Tlp* においては、[RdS] を支持する一方で（例えば Tlp 2.1-2.225）、通常は [GdB] とともにしか出てこない、[KTP] のような言語哲学的な要素についても論じている（Tlp 3.3, 3.314）。このことがいかにして可能であるかについて、多くのヴィトゲンシュタイン研究者は、本箇所と似たような仕方で説明している。

(35) Schopenhauer 1911, 99（= WI, § 15）

(36) Weiner 1992, 24ff. を参照。

(37) Engel 1969, 292; Weiner, 1992, 33, 40ff.; Griffiths 1976, 6f. これに加えて、最近では、多くのヴィトゲンシュタインのモノグラフィーにおいて、ショーペンハウアーの幾何学的ダイアグラムに対してヴィトゲンシュタインが関心を抱いていたことが、指摘されている。

(38) Griffith 1976, 7; Tagebuch 14. 10. 14:「内的関係にある諸命題同士を比較しつつ、それらを構成し、まとめていく必要が何回も生じてくる。このノートにはまさしく図表を添えることができるであろう」（邦訳は、奥雅博訳「草稿一九一四－一九一六」、『ヴィトゲンシュタイン全集1』、大修館書店、一九七五年、一四五頁、一部改変）。

(39) Magee 2002, 311ff.; Janaway 1989, 317ff.; Lange 1989, 97ff. また本稿第二節を参照。

(40) Schopenhauer 1913 において、大論理学は二三四～四二一頁におよぶ。ただし、最後の五〇頁（三七二頁から）は、心理学的な解説を含んでいるので、本来の記号論理学は、約一五〇頁に限られる。

(41) Schopenhauer 1911, 453.

(42) Schopenhauer 1913, 246.

(43) Puntel 1990, 146（強調は筆者レマンスキーによる）、同じく 147 その他を参照。

(44) SBB-IIIA, NL Schopenhauer, Fasz. 24, 102rf.

(45) Schopenhauer 1913, 243.

(46) Schopenhauer 1913, 245.

(47) Ebd.

(48) これらのヴァリアントの説明については、Puntel 1990, 156ff. にしたがう。

(49) Quine 1963 を参照。

(50) 抽象のプロセスというかたちでなされた、ショーペンハウアーによる [KTP] の記述は、今日においてもなお通用する。その一例として、Davidson 1967 の当該テキストを参照のこと。

(51) Schopenhauer 1913, 234ff. を参照。

(52) Janik 1992, 71.

《訳註》

i　邦訳は、丘沢静也訳『哲学探究』、岩波書店、二〇一三年、四二頁。

ii　邦訳は、三平正明、土屋俊、野本和幸訳「算術の基礎」、『フレーゲ著作集2』、勁草書房、二〇〇一年、一二一頁、一部改変。

iii　邦訳は、丘沢訳、七頁、一部改変。

iv　同上、一部改変。

v　邦訳は、丘沢訳、一一頁。

vi　同上、一二頁。

vii　原文はコロン（：）になっている。

viii　原文はコロンになっている。

ix　原文はコロンになっている。

x　論文ではgeziehemdとされているが、ショーペンハウアーの『講義草稿』の原文においてはgeziemendとされている。ここでは『講義草稿』の原文にしたがった。

xi　邦訳は、丘沢訳、二八頁。

xii　原文はコンマ（，）になっている。

xiii　原文では節番号が四となっているが、誤植であると考えられるため、節番号を五に改めた。

訳者謝辞

この翻訳を行う上で、ご指導・ご鞭撻を賜りました方々に、感謝申し上げます。特に、ドイツ語および日本語表現についてご指導いただいた関西学院大学の西章先生、論文としての日本語表現についてご助言をいただいた京都市立芸術大学の永守伸年先生、ヴィトゲンシュタインのテキストの出典に関して諸々のご教示をいただいた小説家の諸隈元さま、そして本論文の原著者であるレマンスキー氏に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。ただし、この翻訳にともなう不備は、すべて訳者の責任によるものです。